わこのみ
猫教通信

第２９号
平成九年
（１９９７）
１０月１５日発行
（年４回発行）

現代連句と序・破・急

東　明雅

序・破・急の理論は、舞楽における拍子の緩急に発し、連歌・能楽に取り入れられ、俳諧にも及んでいる。「楽にも序・破・急のあるにや。連歌も一の懐紙は序、二の懐紙は破、三・四の懐紙は急にてあるべし」（筑波問答）と二条良基（一三二〇～一三八八）は述べている。これは勿論百韻の場合であるが、俳諧、歌仙の場合にも、「一巻、表は無事に作すべし。初折の裏より名残の表半ばまでに、物ずきも曲もあるべし。半ばより名残の裏にかけては、さらさらと骨折らぬやうに作すべし」（去来抄）とあり、芭蕉も「一巻、表より名残まで一体ならんは見苦しかるべし」と言っている。（同書）

現代連句においても、俳諧の伝統を踏襲して、表ー序、裏・名残の表ー破、名残の裏ー急と見る説が多く、これを裏を破一段、名残の表を破二段と見る説もある。故根津芦丈師は「表六句はまず客間に通されて昔なら袴をつけてかしこまっている気持ち、ここではいろいろな制約があって自由な表現活動は許されない。裏の十二句に入ると袴を取り、まずは羽織・袴を付けている気持ち、いろいろな制約が解除になるが、それでもややかしこまった気分が残っている段階、そして次の名残の表十二句はその羽織・袴も取り去って、本当にのびのびと自由を味わう気持ちである。名残の裏になると、また羽織・袴を付け、しかも軽々と一巻を挙げるように心掛くべきである」と教えられた。まことに適切で、且つおもしろい譬えであり、これがやはり、現代連句における序・破・急の最も普遍的な考え方であると思う。

ところが、この序・破・急による構成が、現代連句ではあまり守られなくなって来たようである。流石に、表六句の制禁を破るものは殆どないようであるが、裏に入るや否や、袴どころか、羽織・袴まで脱ぎすてて、われがちに、前句に構わず、突飛な孕句を付けて、連衆を驚かすのを得意とする風潮が年とともに流行し、一巻の裏から名残まで一体の、見苦しい作品が多くなって来ているようである。

これは一座における連衆心の欠如によるのではないだろうか。昭和七年刊の「連句の実際指導」（三森準一）にも「一巻進行上の諸注意」の中に「一巻中、聞こえよき句、手柄ある句は自分が付けるといふ付け方はよろしからず。対手にも功名を譲り、又よき場面に仕向けて調子の高低、作意の緊張緩徐あるがよろしく、即ち巻面（まきおもて）の成績も席上の友誼も、共に和の大道に合するのが連句の本領である」とあるのを見ると、既に昭和初年にも、このような風潮が存在した事を知るが、爾来七十年に及んでその弊は益々重くなって来ている。

さらに考えれば、現代連句ではあまり歌仙が作られなくなっているという実情が、懐紙形式あるいは序・破・急の作り方に対する疎遠をもたらしたと言う事も言えるだろう。

歌仙三十六句が現代生活、あるいは現代メディアに適合しなくなった為、それに代わるいろいろな短形式が考えられている。胡蝶（二十四句）、ソネット俳諧（十四行詩）、居待・出花（十八句）、非懐紙（十八句～二十四句）、二十韻（二十句）、蜉蝣（二十八句）など。たとえば非懐紙などは懐紙形式を打破したことで革期的な形式だと思うが、折もなければ表・裏もない、月・花も自由に処理されている中でも、序・破・急を基にして流れの変化を楽しむ事になっている。

それはそれで結構であるが、この際、私の希望を申せば、せめて毎年一回の国民文化祭の募吟連句には歌仙を採用し、半歌仙という序・破・急のはっきりしない形は採用しないようにして貰いたいという事である。

『夏の日』その同時代性をめぐって

浅沼 璞（バク）

過日、縁あって幻の名著『夏の日』（一九七二年）を入手することができた。当初、正直言ってその古書的価値にのみ喜々としていた私は、『夏の日』の「連句鑑賞の手引き」を、連句のたんなる入門編と決めてかかっていた。ところが読み進むうち、そんな私の予想は、よい意味で裏切られた。つまりこれは、「初心者向け手引き」であると同時に、歴とした「現代連句手引き」でもあったのだ。

たとえばそれは、現代俳句の旗手であった高柳重信の、その晩年の連句的発言と通底する真の同時代性をもっていた。

さっそく具体例をあげたいが、その前に、『夏の日』「連句鑑賞の手引き」の構成について少しふれておきたい。そこでは、連句の芸術性が、四つに分けて提示されている。つまり一句の独自性、そして二句間の付味、さらに三句の転じ、最後は一巻全体の構成、といった具合だが、とりわけ最初の二分野にその同時代性が顕著であった。

まずは一句の独自性においてだが、その短句の項で、〈極小の芸術〉としてあの芭蕉の〈浮世の果はみな小町なり〉が引かれる。これは常套手段であろう。だがそれに続き、短句の〈潜流〉として、意外にも放哉や山頭火の短律作品が掲げられる。これは、一九七六年に発表された重信の評論「俳句形式における前衛と正統」の一節を先取りした卓見として見ていいだろう。そこで重信は、自由律俳句の短律が、短句の韻律（七七）への潜在的意欲によって顕現した可能性について、くしくも語っていたのだから。

ちなみに高藤馬山人が、「夢中三吟」という架空歌仙において、山頭火の七七性を逆手にとり、その短律俳句を短句として付け合わせたのは一九七七年のことであった。

さて『夏の日』にもどろう。つぎは二句間の付味の部分であるが、やはり常套手段として広義の匂付についての説明が一わたりなされる。しかしそれに続く結末部は、本書の白眉となる。今日の連句が匂付だけに止まるならば発展は望めまい、という真摯な危機感から、矛盾付（仮称）という新手法が紹介される。しかもその契機は、次に引くように現代詩の行変えにあるというのだ。

〈今日、現代詩の世界では改行散文の自由詩がその中心をなしているけれども、その行分けの基準となるものは何であろうか。それは一見作者の恣意的なものと見えるけれども、それには必ず行を改め、さらに行を展開せねばならない要因が存在する筈である。だから、これを連句に応用すれば前句には付句を生むべき要因がそこに内在する。その要因を探って付けて行くのがこの矛盾付であり、その移行の要因の多くが矛盾の形で存在するのである。（中略）従来も相対付（あいたいづけ）また違付（ちがいづけ）など、前句の意味や言葉に対して対立したり、矛盾したりするものを付けて行く手法がなかったわけではない。けれども、それらは作品の中で一箇所か二箇所ぐらい、時々用いられるものにすぎなかった。従って、それは連句一巻全体をダイアレクティクの文学と見て、その原理から付けの要因を探り出そうという方法とは本質的に異なるものである。〉

そして三つの矛盾付の試作例があげられ、〈これからぜひとも開発されなければならぬ〉と結ばれる。この思想は、やはり重信の批評「詩壇遠望」（一九六八年）の一節を連句人（レンキスト）の立場から具体的に方法化するものといっていいだろう。何故ならそこで重信は、大手拓次や吉岡実の詩の、その行変えにおける絶妙な連句性をいみじくも説いていたのだ。そういえば廣末保が「詩における二律背反」（一九六一年）で、現代詩と蕉風連句が互いにその詩的存在証明を投げかけあっている、としたのも思いあわされる。これらの同時代性は、現代連句の新しみを示唆していないだろうか。

残念ながら紙幅がつきたが、重信の連句的発言に関しては、昨年刊行した拙著『可能性としての連句』（ワイズ出版）において詳述したことを付記しておく。

（「連句パワー」仕掛人）

婿の国

松本　碧

ロンドンは、ことしの夏も曇天の日が多かったが、南西部の海岸は、打って変わった晴天だった。娘の婿になったイギリス人の両親が、コテージへ招いてくれたのである。そのドーセット州の岬、ポートランドを拠点にして、一週間ばかりを過ごした。

コテージは、一七世紀の石工の小屋だったとかいう、ささやかな石造りの建物である。しかし、内部は三層の居心地のいい空間に造り直されていた。なるほど、これが歴史を尊ぶ国かと驚かされた。

ドーセット一帯は、羊が点々と草を食む丘陵が果しなく続き、その谷々には、藁葺きの家の残る美しい村がある。そして、突如、崖となって落ち込んだ先には、青い海がひろがっていた。

州都ドーチェスターに住む、婿の伯母の家にも寄せてもらったが、庭が広く、さまざまな花が咲き乱れているのに、目を見はった。あずま屋で、お茶をいただいたが、午後の七時、八時になっても青さを失わない空を仰ぎ、花々を眺めるのは、なんとも楽しく、心の底から安らいだ。

ロンドンへ戻り、いよいよ帰国も近づいたので、婿の両親に、どこかで一緒にお食事でもと申し出たところ、わが家で日本料理を教えてください、そして、ご馳走もしてくだされば嬉しい、という返事であった。これには困った。日頃、国籍不明のいい加減な料理でお茶をにごしてきた私に、何が出来るのだろう。夫と相談して、ピカデリーサーカスにあるジャパンセンターに出向いた。地下には、ササニシキなど、日本産のブランド米、調理ずみのうなぎ、油揚げ、それに寿司の素などという便利なものもあった。

鍋でご飯を炊くのは何年ぶりかで、水加減が心配だったが、うまく炊きあがった。そしてインスタントちらし寿司づくりにかかる。夫もなれぬ手つきで稲荷寿司に挑戦。娘は豆腐を使った白あえと肉じゃがである。メインは天ぷら。大根は買えたが、おろし金がない。チーズおろしでやってみたが、うまく行かない・・・。

このような様子を、婿の母が写真に撮り、熱心にメモする。後日、友人たちを呼んで日本料理パーティーを開くのだという。冷や汗が出る。

どうにか、まがりなりに整えた料理だったが、意外や意外、皿はつぎつぎと空になり、残ったのは稲荷寿司だけだった。

英語もろくに話せない私たち夫婦が、こんなふうに、縁者としての結びつきを確かにすることが出来たのは幸いだった。

碧眼の縁者つどふや蜀葵　碧

拙者名字は・・・

横井　徹

ことしの四月から、朝日カルチャーセンター（新宿）で、東明雅先生と式田和子先生の「連句入門」講座を受け始めたばかりの新参者です。

家人が旅好きで、よく留守番を命じられます。連句にほのかな〝想い〟を感じるようになったのは、留守中、家人が何気なく置いていった東明雅先生と式田和子先生の著書を拝見したのがきっかけでした。

「留守番男には何か〝参加型〟のテーマを与えた方がよい」。家人は多分そう思ったのでしょう。

「連句の講座があるから、それを受けるといい」。ひょうたんからコマの如く、話はトントンと進んで、本通信に筆を取らせていただくところまできてしまいました。

「こんな面白いものはないから」

連句の効用を問われたとき、式田先生は、そう言うことにしていると書いておられます（『年を重ねるのもわるくない』三笠書房）。

面白ければ、とかく途切れがちだった家人との会話も〝付味〟の糸がほぐれそうです。

ー拙者名字は風の篠原（桃青）

こんな句が付けられたら、と「連句入門」に励んでいます。

夏宵江戸風芸鑑（みちかよにえどのうつしえ）

坂本 孝子

「三つ子の魂百まで」と言う諺があるが、中川哲氏はまさに三才の頃、おばあ様に連れられて見た招魂社の小屋掛けの記憶から始まり、戦中戦後にわたる厖大な小芝居の体験的記録を一書『東京小芝居挽歌』として上梓され、平成九年八月三日その出版記念会が寄席「お江戸日本橋亭」で催された。

舞台はまず袴姿の豊田好敏、ご子息の中川凡、中央に中川哲の三氏が居並び口上。東明雅先生他の祝辞に続き乾杯！　折しも哲氏は喜寿を迎えられ、キヌ夫人との金婚式も近い由にて、紫の頭巾・ちゃんちゃんこ・夫婦座布団の記念品が贈呈された。その後は林家正雀の落語、神田松鯉の講談、そして歌舞伎舞踊家の勝美嘉之氏と中川哲氏の対談「歌舞伎よもやま話」。哲氏は現在病後リハビリ中と伺っていたが、蘊蓄を傾けてのお話が大変結構で、至ってお健やかに感じられた。演芸のトリは竹本朝重・三味線豊澤幸治の義太夫「壺坂霊験記」。心尽くしのお弁当とほどよき酒の酔い。夏宵の盛会は一同の手締めでお開きとなった。『東京小芝居挽歌』は各紙各誌に絶賛され売れ行きも好調の由、哲さん本当におめでとうございました。

祝『東京小芝居挽歌』上梓

俳諧二十韻　夏芝居の巻

大入りや仁と柄との夏芝居　東　明雅
　染帷子に献上の帯　式田和子
吟醸酒雑魚もほどよく嗜みて　中川　凡
　石けりけんけんこの指とまれ　下鉢清子
雲晴れし路地の隅々照らす月（ウ）　倉本路子
　梓紅葉に逢引の巫女　原田千町
猪穴に嵌ったなんて変なひと　上月淳子
　ポルシェの鍵をぽんと投げだし大窪瑞枝
観覧車眼下に展く未来都市　鈴木美奈子
　中学生の鼓笛隊行く　式田恭子
読みさしの漫画雑誌を置炬燵（ナオ）　八代　嫋
　櫺子格子に冴ゆる月影　中田あかり
後ろより「あら哲さま」とよりかかる　梅田利子
　どうするどうするわざとよろめき鈴木慎二
平成のダイヤモンドに目がくらみ今宮水壺
　ビッグバンから飛び出した鳩　高橋豊美
太棹の響きて喜寿の祝なり（ナウ）　蒲原志げ子
　岸辺に舫ふ人も朧に　豊田好敏
眉隠し花ごもる僧姫供養　中川　哲
　双蝶々紫の夢　中川キヌ

平成九年八月三日
於　お江戸日本橋亭

ゴルフと連句

植木 士郎

ある時、表題の組み合わせについてフッとひらめくものがあった。これは実に深い親近性がある・・・。

まずゴルフのワンラウンド十八ホールというのは半歌仙の句数。一日二回まわれば（日が高くて元気ならそうするだろう）三十六句、いや三十六ホール。歌仙と同じだ。それから、各ホールそれぞれ、ロング、ミドル、ショートと配分があり、只々力いっぱいひっぱたいていいわけではない。連句にも、有心、アシライ、遁げ句、と気持ちの加減がある。連句でいう「夜店のステッキ」風なプレイ（一句陶酔的集中主義）は、ゴルフでは初心のスタイルである。といって、器用なだけでも面白くないけれど・・・。

それから、連句もゴルフも長丁場であって、人間万事塞翁が馬というか、一回や二回（まけて三回や四回）のミスショットで気落ちすることは全然ない。というか、失敗と見えても、もって行きようでは、反攻のキッカケにすることができる。平凡な前句が、うまい人の付句によって面目一新するのはいくらも見せられるところだ。

そんなこんなで、連句もゴルフも、七転び八起きの人生になんとよく似ていることか。

猫蓑同人会

歌仙「黒薔薇」　東　明雅　捌

鹿鳴館好みの女黒薔薇　明雅
巻毛に残る淡き香水　ゑみこ
片陰を拾ひ拾ひてお使ひに　道子
また数を増す放置自転車　好敏
百の膳並ぶ広間に望の影　淳子
目を楽します秋茄子の色　利子
烏渡る木曽三川を過ぎし時　淳
プロデューサーに主役告げらる　敏
痩せぬこと肥らぬことも契約に　ゑ
朝寝昼寝を続け半生　利
摩呵般若波羅蜜多心経読誦して　道
仏壇の菓子猫がちょっかい　淳
鮟鱇の肌てらてらとぬめる月　敏
雪をんな待つ六本木裏　ゑ
傘の内後姿はニューハーフ　道
便民店はコンビニのこと　同
好と訪ひし洛陽花万朶　利
初虹出たと子供らの声　淳
港内にかしぎて入る蜆舟　敏
醤油の匂ひ路地にあふるる　ゑ
無言電話心あたりはなけれども　利
許せる嘘と許せない嘘　敏
隧道をひそかに掘って突入し　淳
アンデス産のでかいゴキブリ　敏
蚊帳吊りて雷恐き一人酒　利
ほんにかはいい年下の夫　ゑ
キムタクに似てると肩を舐めまはし　道
苦瓜の味ふるさとの味　淳
三日の月獅子の屋根見おろして　道
芸術祭に叩く和太鼓　ゑ
橋のない川渡りたる老作家　同
あづまコートの如きもの着て　淳
だんだんと煙草吸ふ場所限られぬ　敏
新入社員複写とる役　利
花吹雪夢に天人舞ひ下りて　雅
母を誘ひて弥生狂言　道

平成九年六月十八日　於　旧古河庭園
連衆　吉村ゑみこ　加藤道子　豊田好敏
上月淳子　武村利子

歌仙「梅雨の薔薇」　桑原美津　捌

梅雨の薔薇カンバスはまだ真白なり　美津
水輪重なる庭の濁井　和子
くつろぎの軽音楽を揺椅子に　文子
渡り廊下のスリッパの音　冨美
山の端に三五の月のただならず　澄子
大樹の梢に眠る椋鳥　秀樹
萬聖節仮装の子等の戯れる　秀
メイク落してまだ好きかしら　和
お定まり殺し文句もききあきて　文
かたくむすんだむすびなつかし　澄
コンビニで払ふガス代ＮＨＫ　文
杜氏来るも碧眼の人　和
冬の月風止む湖の檸檬いろ　冨
切替へを待つ電車単線　和
大臣はゆとりゆとりと云ふけれど　澄
禁煙席で脳が散らかる　秀
デジタルで落花繚乱演出し　和
湧きし如くに鳳蝶舞ふ　文
かぎろひて安らぎのあり天守閣　冨
初風炉には唐津斑目　文
横切ったをんな裾曳き声弱め　冨
駅前交番トイレ教へる　秀
㊀*の薬重たく持ち歩き　和
ごねた甲斐あり伊良部好投　澄
浮き沈み三寒四温幸不幸　秀
逝く年送る密会の宿　文
手枕の型のままなる夢うつつ　冨
そっと抜きたるタロット**の月　文
猪罠に小さきが掛りあはれなり　澄
これっきりかとしたむどぶろく　和
へぼ将棋待った待たぬも亦楽し　文
ＣＳ放送新規開業　秀
ディズニーのアニメタップでビビデバビデブー　澄
母は箪笥に宝貝入れ　冨
たのもしき花を幾重の長堤　津
ビルの窓からしゃぼん玉吹く　冨

*㊀＝老人国民保健　**タロット＝占

平成九年六月十八日　於　旧古河庭園
連衆　式田和子　橘　文子　村田冨美
八角澄子　青木秀樹

歌仙「薔薇香る」　篠原達子　捌

大正ロマンしのぶ館や薔薇香る　達子
薄暑の窗に開く鎧戸　瑞枝
地引網帰省の子等も加はりて　徒司
ズームアップで巨船捕らへる　利子
彗星の去りし空なり月明し　蓉子
温め酒を酌みかはす猪口　美恵
重陽の後鏡に結ぶ帯　枝
ナルシシズムは母の遺伝で　蓉
携帯を持たねば出来ぬ今の恋　恵
塩漬相場ちょっと上向く　枝
歌仙では平句得意の平社員　司
融通無碍を座右の銘とし　蓉
月蒼し三万フィート凍土上　恵
風疼きをりマンモスの牙　枝
学究の窓に拉麺すすりつつ　利
とれる資格はぜんぶ身につけ　恵
弁天の思し召すまま花の散る　利
鶯合はせ囲む人垣　同
わらんべの膝に春泥乾きゐて　恵
迷子の迷子のやーいピノキオ　蓉
東京の地下に東西南北線　司
銀行つひに縄付きを出す　枝
入院の重役連は元気さう　恵
アイスクリームばかりなめてる　司
膝枕サッカー場の宵涼し　恵
紐といふ名の男やさしき　枝
門叩く仇な年増は野晒しか　同
ビルの谷間のおかず横丁　司
晋平の一気にかきし月の曲　同
蹠にひたと寄せる初潮　利
芋虫を真似て屈伸ストレッチ　恵
老いのファッション巣鴨名高き　蓉
猿軍団堂々仕切る雌の猿　利
新世紀への期待ふくらむ　蓉
展望台満都の花を見渡して　達
人のあはひを蝶の舞ひゆく　利

平成九年六月十八日　於　旧古河庭園
連衆　大崖瑞枝　杉内徒司　梅田利子
五味蓉子　山口美恵

歌仙「薔薇の苑」　高瀬美保　捌

駒込や旧き館の薔薇の苑　美保
香りをまとひ舞へる夏蝶　千町
魚おろす包丁研ぎを頼みゐて　庸子
方言ややに混る饒舌　啓子
月の出を待ちつつ小舟漕ぎ出し　弘子
体育祭の近き町の灯　良彌
なんきんに逆三角の目を二つ　啓
尼の歩みに揺れるロザリオ　町
俤はロロブリジータあでやかに　庸
ゆっくり廻るLPの盤　弘
引っぱれば際限もなく糸の解け　町
上司の指示に身の凍みゐたる　庸
新世代頭でっかち寒の月　彌
ノンアルコールドリンクで酔ひ　啓
俳諧の国際交流にぎはひて　弘
俗には俗のふさはしき形　彌
花吹雪麒麟を追うて駈けしよな　町
スーツケースにはねし春泥　啓
待ちかねし男子誕生凧を揚げ　庸
丸に木瓜母方の紋　啓
エアクッションぷつぷつ潰し鬱の午後　町
だましだまされ次はどうする　弘
助手席にあの娘乗せたい四駆動　庸
「失楽園」をしまひまで真似　弘
枯山に不連続線牧の柵　啓
鴨の治部煮に添へし太葱　町
自販機の氾濫の世にまごまごと　彌
煙草をつけてちょっと間をとり　啓
マイウェイ口笛を聞く月の道　庸
冬近き風すぐる電線　弘
濁酒子別れものの芝居見て　町
画廊に並ぶ余技のスケッチ　啓
性格はいろいろあっていいんです　彌
5%の早き計算　庸
かくれんぼ一村つつむ花明り　保
夢のごとくに囀の降る　弘

平成九年六月十八日　於　旧古河庭園
連衆　原田千町　久保田庸子　岩井啓子
市野沢弘子　佐藤良彌

歌仙「蝉生まる」　高橋豊美　捌

この庭や見へぬところに蝉生まる　豊美
額あぢさゐの藍のくっきり　清子
工房にギヤマン吹きて遊ぶらん　健悟
見分けのつかぬ双子兄弟　治子
後の月まらうどの膳ととのへて　啓世
半纏を干す路地の爽やか　悟
鯊釣りの時も外さぬウォークマン　同
イタリヤみやげピアスゆらゆら　清
速達で恋文が来る昼下り　世
浮き名流してみたき新発意　清
焼饅頭甘さ程よくウーロン茶　治
日曜大工の書斎仕上る　悟
凍月に趣味の軍服着て集ふ　同
春待つ径かろき足音　世
やうやくに臓器移植の法整備　清
ピアノの上が好きな三毛猫　同
花越しにみちのくの湖ながめゐて　治
人見知りする吾子の野遊び　悟
待合室絵凧がひとつ忘れられ　清
骨董求め村をへめぐる　悟
いそいそと受話器をとれば「墓地如何」　世
愚痴聞く人がおとなりにをり　清
虹見上げ夢見ることの今も尚　治
卓にこぼれし泡盛の酔ひ　清
若づくり太コーデュロイ髪も植ゑ　世
ルーズソックス脱がすのが好き　豊
じれつたいわりなき仲にわり込んで　清
声なめらかに神の祝福　悟
思ひたち田毎の月を賞でる旅　清
峰の紅葉の色の鮮やか　治
園児らも正客となる風呂名残　悟
明珍火箸の錆もおもむき　清
弘経寺の蕪村の句碑はよみかねる　世
餌を求めて雀さはがし　治
天空に響くテノール花万朶　豊
乳母車押す暮れかぬる頃　世

平成九年六月十八日　於　旧古河庭園
連衆　下鉢清子　佛渕健悟　加藤治子
中島啓世

歌仙「木香バラ」　長崎和代　捌

咲き初めし木香バラの館かな　和代
藤椅子二脚並べある庭　淑代
夏期講座電子辞典を引きもして　孝子
ちびたクレパス箱につめ込む　壽子
月落ちて運河の橋を潜る船　けんのすけ
生活の音の動く爽籟　壽
栗を焼く啣へ煙草に顔しかめ　孝
日曜の弥撒靴を履き換へ　淑
開拓の荒地に吾を追って来し　孝
カリブ海にも連れてゆきたい　淑
やがてくる金融界のビッグバン　孝
不透明ガラスバリバリと破れ　壽
全集の塵を払ひて漱石忌　け
月に謡ひつ雪見酒なり　孝
園長にゴリラの見合話くる　淑
ひと目で分る渾名親しき　代
病室に花惜しみつつ書く日記　け
うぐひす鳴きて明くる山の湯　孝
しゃぼん玉吹く子の顔も飛んで行き　壽
貝殻骨のあたり痒がり　淑
縄文期活断層の跡も見え　け
借用証の楔形文字　孝
白夜にはバックギャモンの指南役　淑
沖を目指せばいつか人魚に　孝
片恋は讃岐の石の濡るるまま　け
不承不承のいつか身籠り　壽
脱サラの仏道修業揺れやすく　淑
お子様ランチ旗は三角　孝
影を曳く立待月の樹の下で　壽
登窯焚く脊の冷まじ　孝
緞帳の錦重たく芸術祭　同
寄付の残りで鉢洗ひする　け
リサイクルジュースの缶を圧し固め　同
思ひ出したき古里の春　壽
時を経し薄墨桜花万朶　代
鞍をはづせば蝶の飛び立つ　淑

平成九年六月十八日　於　旧古河庭園
連衆　浅賀淑代　坂本孝子　杉山壽子
おおたけんのすけ

歌仙「小松石」　峯田政志　捌

梅雨も佳し洋館包む小*松石　政志
　径のほとりに香る山梔子　麻子
コンパスの連続模様表紙絵に　嫋
　バイエルさらふ姉と妹　郁子
金泥を湖に流して望の月　路子
　蛇もそろそろ穴に入る頃　同
秋祭山車の準備に余念なく　郁
　帰郷のあの娘背丈のびたる　麻
通勤の時間合はせる片思ひ　路
　携帯電話呼出しを待ち　郁
銀行の営業マンは西東　麻
　V・I・Pも態変りせり　郁
寒月に管制塔の影かすか　嫋
　森の奥より木菟の声　麻
揺り椅子に父の日記をひもときて　嫋
　仏の肩の埃払ひぬ　路
花万朶斑鳩の里人溢れ　郁
　ギター少年春愁の昼　麻
衛茂七に扮する女義士まつり　路
　大吟醸でまづは乾杯　嫋
雁皮紙の奥の細道世に出でて　路
　九官鳥のお喋りが止み　志
秀才の末路に罪の落とし穴　麻
　薪能見て筋を違へる　嫋
紫の薔薇を一本くれしひと　麻
　香水に酔ひ眼差しに酔ひ　郁
いつか皆爺様婆様になるとです　路
　エン**デュミオンの永久の睡りよ　嫋
昏れてゆくスニオン岬月織し　麻
　技を受け継ぎ醸す葡萄酒　郁
菊人形仕上げの刀差してゐる　嫋
　八十年は夢のまた夢　郁
野良猫がいつか家族の和の中に　路
　はづれ馬券を散らす春風　同
カーナビで花の名所を尋め歩き　志
　もてなしにでる青饅の鉢　嫋
*真鶴産の安山岩、濡れると色を増す
**ギリシャ神話の不老不死の眠れる羊飼い
平成九年六月十九日　於　旧古河庭園
連衆　内田麻子　東郁子　八代嫋
　倉本路子

猫養会

歌仙「白絣」　東　明雅　捌

白絣未だなすべきこと多く　明雅
　扇忙しく使ふ玄関　弥生
サーファーは大きな波濤乗り切って　瑞枝
　隠れんぼする子供らの声　時子
下町の谷間を覗く昼の月　佐紀子
　鍋にいっぱい煮えし藤豆　枝
運動会終りし後のコップ酒　生
　肩を抱いたら人違ひなり　同
夕暮れの遠い樹となるあの女も　夏生
　スパイスの香の包むジャワ島　時
御仏は指の先からゆらめきて　生
　仕立屋銀次偲ぶ半生　枝
月仰ぐ深き歎きの息寒く　佐
　火の見櫓に巣くふ黒猫　時
町役は冠婚葬祭まとめ役　生
　カモミール茶でリラックスする　時
頁剪る詩集の厚き花明り　枝
　東踊りのにぎやかな三味　時
淡雪に*子舟の篝燃え　枝
　地雷いつでもお分けしますよ　夏
十四才トンカジョンなど屋根裏に　同
　水に映して透きとほるぼく　佐
あをみどろかづく女の夢に来る　枝
　責絵校了熱帯夜明け　夏
炊飯の煙山まで流れゆき　時
　宇宙探査機２００１年　生
クローンの月の鏡に我と汝　枝
　老いたわが血を秋の蚊に頒け　雅
鼠茸湿地茸舞茸天狗茸　枝
　熊野の森に棲みし碩学　同
掘りあてて遺蹟は上から七番目　夏
　鯨の腹の中に幾日　佐
停年の「うさぎのダンス」習はうか　夏
　非番のナースこくりこっくり　時
花の宴大名屋敷借り切って　雅
　いささか風のある春の宵　佐
平成九年七月十六日　於　江東区芭蕉記念館
連衆　本田弥生　大窪瑞枝　梶井時子
　間佐紀子　村野夏生

歌仙「夏萩の」　市野沢弘子　捌

夏萩のほろほろかかる翁の碑　弘子
日傘をたたむ川の船着　孝子
飼育槽目高あめんぼ飼ふならん　清子
カラーフィルムの幻灯を見せ　代々子
野分晴山の端出でし望の月　美津
芋茎束ねて軒先に干し　守男
鹿寄せの大和の旅へレンタカー　孝
偶然のごと秘書と落ち合ひ　男
喜びも罪も覆へる裾長く　孝
ココアにふはと添へしマシュマロ　代
色々と入りし塾になじめずに　清
太極拳を凍月の下　同
工場の紅旗に集ふ息白し　孝
版画の個展ふるさとの町　津
酒醸す親子三代女系にて　孝
泥棒よけに竹刀一振り　津
花の径犬が顔出すデイパック　代
紙飛行機を飛ばしうららか　男
春の雲守禮の門に流れつつ　孝
パソコン通信北の仲間と　男
老眼で長句短句に四苦八苦　清
鳩が生まるる手品師の帽　孝
トトロの木雪をうっすら冠りゐて　津
朴念仁と知りつつも惚れ　代
病む時は聖母の様に君美しく　孝
磯の芥を波が曳きゆき　清
柿本躬都良の果てし隠岐はるか　津
細巻煙草つけるライター　清
月浴びて佇つオペラ座の甃　孝
秋懐深き留学の友　代
蛇穴に入る時この世静かなる　清
染付陶器探す横丁　津
詰将棋夢中になりて乗り過ごし　男
秘仏開帳御誦経の中　孝
咲く花の百の石階嬰を抱き　弘
麓の村に淡き初虹　清

平成九年七月十六日　於　江東区芭蕉記念館
連衆　坂本孝子　下鉢清子　橋野代々子
桑原美津　近藤守男

歌仙「黒百合」　内田麻子　捌

黒百合を翁は見しや山の朝　麻子
生れし蝉のひそむ葉の裏　蕉肝
ポロシャツのポケット切符透けて居て淑子
禁煙室ですすむ商談　みづゑ
不夜城の港に遅き月のぼり　政志
BGMの曲の爽やか　文子
勝相撲手刀切って揚々と　文
足もからまり箸もからまる　淑
意外にも何時もと違ふ京言葉　ゑ
遺伝子近き公卿の婚姻　肝
鑑定のお宝漫画初版本　文
肥満野良猫のっそりとゆく　志
凍月の堂におろがむ千手仏　淑
氷を割って釜の水汲む　肝
金融街庶民どうなるビッグバン　志
ただ立ちつくす門の衛兵　文
「夕ぐれ」と言ふ花が散る通り抜け　ゑ
背の幼なの持つ風車　文
荒むしろ敷いて並べる農具市　淑
満寿夫美術館出来し松代　ゑ
地図になき島の生活サバイバル　淑
針を投げれば魚の入れ食ひ　肝
新台はぱちんこ荒しに追ひつけず　志
御輿かつぎに女連あり　文
湧きいづるフェロモンひたと引き寄せる　淑
海を渡って通ふシーザー　肝
人知れず砂漠の砂に消ゆる川　文
ごみの捨て場の行き所なく　肝
居待月謡の稽古端座して　文
指さす丘の彼方雁　志
竹筒を火になめさせる紅葉酒　肝
印半纏着たるいなせに　ゑ
下町が国際交流奥座敷　肝
プリクラ操作爺と婆とが　淑
花篝舞妓も居たる夜の苑　麻
親亀子亀鳴くとしもなく　ゑ

平成九年七月十六日　於　江東区芭蕉記念館
連衆　近藤蕉肝　金久保淑子　山口みづゑ
峯田政志　橘文子

歌仙「風鈴」　梅田利子　捌

風鈴や誘うてみたき江戸の風　利子
片陰拾ふ黒塗の下駄　路子
教室は蟹が来てより賑やかに　健悟
正面飾る優勝の額　紀子
雲分けて都心をのぞく小望月　志げ子
屋上庭園サフランを摘む　紀
何気(ウ)なく転職話秋団扇　路
追っかけはたと絶えし楽団　悟
ロンジンは二人の時を刻んでた　同
香港を呑む双頭の龍　志
酢を使ふ不眠治療のこの効きめ　悟
これは骨皮筋衛門殿　路
寒月の遺恨試合は正眼に　紀
抜き足差し足リボンした猫　悟
原色のシャガールの絵にニンフ舞ひ　路
津々浦々に美術館建て　利
花冷えに二世議員のそつのなさ　悟
大玉小玉シャボン玉生れ　志
印結(ナオ)ぶ仏の肩の春埃　路
透明といふ存在もあり　志
バーボンの半ば飲まれてバーの棚　紀
区画整理が廁動かす　悟
行列の軽鳧の親子に諸車停止　路
優しさ欲しい世紀末なり　悟
バーチャルの恋と知りつつ癒されて　紀
振られ男の励むバーベル　志
やっちゃ場の稼ぎは祖母が管理する　悟
手狭になりし代々の墓　紀
シーサーの睨み返せる蛾眉の月　路
ベストセラーに夜長楽しむ　志
烏兜(ナウ)波郷のごとき一句欲し　路
遡上して行く廃船の水脈　志
浜通り飾る写真は未来像　路
名物饅頭予約して置く　志
来し方の空華となりし花いろろ　利
どんたく遠く響く裏山　紀

平成九年七月十六日　於　江東区芭蕉記念館
連衆　倉本路子　佛渕健悟　椿紀子
蒲原志げ子

歌仙「河童忌」　上月淳子　捌

河童忌や汨羅の淵にひそむもの　淳子
岩の合間に大きはんざき　順子
白絣子の肩上げを直しゐて　庸子
きのふ覚えが歌口づさむ　千町
一巡の盃回りくる月の庭　水壺
ずんだ餅には田の畦(くろ)の豆　あかり
PHS紅葉見頃と知らさるる　庸
ヘヤピンカーブ過ぎるレーサー　町
はにかんで嫁に来いよとそっぽ向き　庸
親の許さぬ恋のゆくたて　町
掛け軸の村童帰牧笛を吹き　壺
単線線路照らす寒月　り
二人して惚けを封じる粥啜り　順
指紋押捺拒否の十年　町
特高と憲兵が来る夢の中　壺
シーソーゲーム今は上なの　り
大障害越えたる馬に花吹雪　庸
春の虹立つ野辺のひろびろ　り
弥生(ナオ)狂言見に行かんかな三之助　町
ちょっと便利に使ふ風呂敷　順
平成の御代は世界の水も売れ　り
紳士面して掏摸と泥棒　庸
たまごっち泣く子と地頭には勝てず　順
性懲りもなく重婚の癖　壺
悪びれず神父の前に誓ひ立て　り
餓ゑ救済に年末の街　町
だんだんに肩身の狭き喫煙者　順
故障直りし火星探査機　町
月の海白きじゅごんの遊びをり　同
ベルゲン港に風の身に入む　庸
冬支度横にしてみる縦の物　壺
打ち止めくらふ駅のパチンコ　順
過ぎし日のおろそかならず同窓会　り
名画の笑まひいつも変はらず　順
旅箪笥手前楽しむ花筵　淳
耳をすませば遠き囀り　壺

平成九年七月十六日　於　江東区芭蕉記念館
連衆　和田順子　久保田庸子　原田千町
今宮水壺　中田あかり

歌仙「梅雨明くる」　篠原達子　捌

頼もしき像の翁や梅雨明くる　達子
挨拶交はす土用芽の庭　和代
大瑠璃の探鳥会に招かれて　暁巳
電子手帳に入力の詩　淑代
惜しみつつまだ眺めゐる真夜の月　一恵
絲瓜の水を瓶に八分目　同
春日野は鹿の角切るころならん　淑
裏木戸ぎいと人の訪れ　和
貢君アッシー君を兼ねる彼　巳
インディゴブルーのお揃ひで決め　和
燃えるごみ分別ごみに資源ごみ　恵
新居決定校区優先　巳
凍月に駿のアニメみて帰る　淑
冬の苺にミルクそそがれ　巳
二台来て手持無沙汰の献血車　和
鴉は森へ還ることなし　淑
母の文花のしをりも懐かしく　和
紙風船をたたむ夕暮　巳
磯遊び隣近所に声かけて　恵
駐在さんは今日も出張　巳
凶悪犯捕へてみればオランウータン　恵
鎖状となりしアミノ酸の基　淑
助教授になれぬ講師の青みどろ　巳
雪渓たづね奥穂高まで　淑
最新のナイキシューズの靴擦れに　巳
メンソレータム媚薬まぜしか　同
虞美人の眉刷くことの現なる　淑
楽屋見舞の山と積まれし　和
家元が地下に秘したる古酒の壷　淑
沓脱石に転けて見る月　巳
谷戸深き庫裏にはじまる冬支度　淑
グランパ時計安政の作　同
碁敵の通るを待ちてさそひ入れ　恵
鶯餅の黄粉ほろほろ　巳
かっぽれにやんやんやの花筵　達
弥生の池に亀の行列　恵

平成九年七月十六日　於　江東区芭蕉記念館
連衆　長崎和代　島村暁巳　浅賀淑代
山崎一恵

歌仙「ルーブル展」　豊田好敏　捌

ルーブル展閉幕告ぐる溽暑かな　好敏
睡蓮浮かぶ池面ビル影　香
風炉手前袱紗捌きの鮮やかに　郁子
いちどで糸の通る嬉しさ　美恵
技すすみ複雑系で月旅行　慎二
鈴虫すだく玄関の甕　安子
松茸のしろは教へぬ秘中の秘　郁
趣味が昂じて女探偵　二
マヌカンの服を着せたり脱がせたり　香
インターネットで犬を注文　同
橋龍の顔にこやかに弥次郎兵衛　安
北極またぐ男一匹　二
お茶漬に和む軒先月冴えて　恵
聖夜のキャロル清く厳か　郁
消費税慣れてきた頃医療費も　恵
待合室で舐めるのど飴　安
本丸を包みし花の山を賞で　郁
鮎放流のニュース流れる　恵
揚雲雀スカイダイブを友として　二
八甲田にて出遇ふ妖怪　敏
鬼太郎が夜叉の面をはぎとらん　香
地震の予知は至難なること　二
早々とビアガーデンに繰り込みて　香
「いづれがあやめ」か古語の連発　恵
お目当ての人はまた別忍び逢ひ　郁
岩風呂の湯気白きししむら　二
副葬の埴輪もひそと眠りゐて　安
次の世紀にたった三年　恵
ひたひたと月の出汐裾濡らし　安
不知火を見ず火の国に生れ　郁
秋風が古書のページをめくりをり　香
シェークスピアを知らぬ若者　恵
足し算は電卓よりも算盤で　安
傘寿の旅に旅券申請　郁
流行りなるガーデニングは花の中　敏
とどくと見えて逃げし風船　安

平成九年七月十六日　於　江東区芭蕉記念館
連衆　若松香　東郁子　山口美恵
鈴木慎二　神谷安子　東郁子

歌仙「玉蟲乾ぶ」　八角澄子　捌

へその緒と玉蟲乾ぶ手函かな　澄子
毎年のことのべる絵筵　和子
畠より完熟トマトもぎ取りて　道子
スパゲッティはバジルでもよし　千寿子
夜学子の指さす彼方三日月　嫋
歌ひて帰る爽籟の道　真呂
後(ウ)の雛思ひ山ほど書きつける　千
梨園の女形掟重たく　嫋
ぽっちりと涙も混る酒の席　和
香港島に中国旗ゆれ　道
ブランドのウッドで決めたこのホール　嫋
雪吊り縄をかける名人　和
月を背にうからやからと初大師　千
孫にせがまれ土産いろいろ　呂
届きたる手紙のシールどらえもん　千
飽食の猫鼠追はざり　呂
勝新の夢に繽紛花卍　和
グラデーションに霞みゆく見ゆ　道
海女(ナオ)競ふ笛を合図の磯開き　同
お給料日はやはり鱧かな　千
ぬらりひょんいつのまにやら座りたる　嫋
箒目つきし土間に大甕　同
増やさずに足さずに老の春支度　道
アノラック着てカーニバル行く　嫋
グラマーなをんなに高き喉佛　呂
巨乳細腰悲鳴嫋嫋　和
旅の宿月もすばやく西へ去り　呂
雲居のひまを渡る雁　同
さぐりつつ棘抜き居れば木の実落つ　嫋
シャッターチャンス阿吽むつかし　澄
老教授叙勲の沙汰を待ちわびて　呂
回転椅子を窓にまはしぬ　道
玻璃越しに降りみ降らずみ　潦(にはたづみ)　和
田螺居眠る山峡の田井　呂
狭間より鉄砲構へ花の城　澄
遠足の児等笑顔うつくし　千

平成九年七月十六日　於　江東区芭蕉記念館
連衆　式田和子　加藤道子　紺野千寿子
八代　嫋　木村真呂

深川連句

歌仙「大川や」　東　明雅　捌

大川や筏引きゆく秋の翳　明雅
柳はらりと散りかかる月　千町
虫の声窓辺の机置きかへて　淑子
独り稽古の気ままなる囲碁　文人
天瓜粉子は真裸で這ひまはり　かりん
ブドージュースのゼリーぷるぷる　町
スーパー(ウ)の駐車場にもポルシェゐて　ん
気があるやうでないやうなふり　人
舞姫の肌こまやかに抜衣紋　淑
拝啓かしこ綴る恋文　ん
彫上げし普賢菩薩は象に乗り　町
燗熱うせよ襤褸市の人　人
二日月物白々と凍りつく　淑
オゾンホールの広がってゆき　町
世界遺産家ごと婆も指定され　同
堅い豆腐が店の売物　人
西行の花あればこそ吉野山　淑
旅の寝覚の頬白の歌　人
春暖炉(ナオ)けふの計画変更し　ん
ゴルフ仲間にかくす腰痛　同
先王の好みし古城タピストリー　町
砲車に載せてはこぶ御柩　同
深紅なる薔薇一輪を拾ふ道　淑
嘘八百は堕すつもりで　町
みちのくの女はみんな雪女郎　人
村のはづれに紙漉の家　同
夢の世の分限帳に名がのって　ん
ミカエル祭に孫の洗礼　町
箕戸蔵ふ町の空ゆく望の月　人
新幹線の駅も露けし　淑
老眼(ナウ)にふるさとの名を読みとりぬ　町
呆けた同志のダンス・パーティ　淑
出る杭は打たれる前にひき抜かれ　同
建て前を待つ庭の暖か　人
セロで弾く落花の曲はアンダンテ　雅
石鹸の玉に犬が飛びつく　ん

平成九年九月七日　於　江東区芭蕉記念館
連衆　原田千町　金久保淑子　二村文人
登坂かりん

連句の始まりと未来 3

内田 麻子

ー前回賦物連歌のつづきー

物名連歌とは、源氏国名（源氏物語の巻名を長句に諸国名を短句に）・古今集作者・三代集作者・歌仙・伊勢源氏歌詞・鳥魚・草木・魚河名・人名・人名草・黒白・五色・浮波物・差物引物・名所・鷹詞・恋・本歌取・山家・畳字・文章・俳諧・回文・韻字・有心無心　冠字連歌とは、

以呂波・名号・宝号・経文・要文

Ⅳ 南北朝期の去嫌中心の連歌

言葉遊びの要素の強い賦物連歌は、形式技巧のもので、句から句への内容的、意味的なつながりの変化により興味が移って、十四世紀の後半となると表八句さえも賦物をとらないようになっていった。即ち連歌は賦物の時代を去って、式目去嫌の時代に入って行く。

連歌式目の起こりは「俊頼髄脳」「袋草子」、降って順徳院著「八雲御抄」には、故実、禁制、賦物の割合が各三分の一ずつを占めている。そのうちの禁制的な制約、規制が独立し集成して成ったものが連歌式目である。

冷泉家蔵の「草子目録（一三二〇書写）」に連歌式目の制定編者として、中納言定家・家隆の男隆祐・信実・行家・入道為家などの公家歌人をあげている。以後堂上連歌から地下連歌師の時代となり、道生・善阿・救済等の名があげられていくのである。

Ⅴ 明月記にみる定家の連歌

一二〇六年八月「新古今集」の勅撰で和歌所では、その分類や切継の作業に追われて居た頃、後鳥羽院の御所で「有心衆」と「無心衆」の連歌対抗戦が院の御声がかりで催されたことは「明月記」にも記されて居ることだが、和歌の三句切に七七を付ける文学的な有心衆とそれに対抗して後に言うところの俳諧風の作者達が一座したということも興味あるところである。この時は「片方が六句連ねたら、負方は『逐電』せよ」との院の命により、出来不出来より即吟を競ったので、さすが手馴れの「有心衆」が勝ち「無心衆」は御所の庭に坐らされたということである。

両派の連歌は、その後も続き雅びの世界と狂連歌の世界が同時に詠まれて居たことは、現代の連句に通ずる流れかと思う。

定家については、現在「冷泉家の至宝展」が東京都美術館で開催中で、俊成・定家・為家と三代に亘って歌道の基礎を固め、それが冷泉家により現代に引継がれて居ることに、深い敬慕の念を覚えるが、藤原定家といえば和歌、又百人一首の撰者ということが一般的な印象と思う。

定家の残した厖大な日記「明月記」によると、晩年の定家は和歌よりも連歌に興じ、殊に六十歳代に最も盛んに連歌会を催し、「老狂の数寄」などと記しながら嘉禄元年四月十四日実氏第連歌出席・好士の老女招請・中将執事・白何々屋。百二十韻に及ぶ。とその盛んなる様を記録している。

嘉禄元年四月四日の禁裏の連歌に「女房初学両三人」が参加したとも記され、男女・老若交えての一座の楽しさが伝わって来るようである。定家の明月記も承久の変の頃、六年ほどが欠けているが、その後の記録は、定家六四歳の六回、六五歳になると為家邸、自邸での会が十四回に及んでいる。

六六歳は七回、六八歳九回、六九歳七回、と晩年の定家は「老狂の数寄」の世界を楽しんで、長年の宮中出仕の苦労も離れ、己の欲するままに、同好の士と一座し、歌道に示した情熱をこの道にも移していった様がうかがえる。

六十歳代に連歌に熱中した定家。これは現代にあてはめれば七十代、八十代にも当たるのではないだろうか。

昭和生れが古稀となった今、連句の世界は熟年の世代に洋々と拡がって居ると思う。

参考文献　伊地知鐵男『連歌の世界』　今川文雄訳『訓読明月記』　目崎徳衛『史伝後鳥羽院』　他

（了）

英語連句の試み　花鳥風月（3）

浅賀　淑代

空が澄んで風の心地よい季節です。『奥』へと芭蕉様の足跡を辿りたくなります。

石山の石より白し秋の風　　翁

Whiter, whiter than
The stones of Stone Mountain—
The autumnal wind.

この訳は、講談社インターナショナルから刊行された、ドナルド・キーン氏の "The Narrow Road to Oku" より引用。石山寺という固有の名称を敢えて英語に置き換え、原句の「シ」の音のリピートが生み出す効果を、「白」と「石」を繰り返す小気味よいリズムで再現しようとしています。訳者の読者へのサービスが素直に伝わってきますね。

さて、発句は切れていること。この大切な条件は、日本語のように、や、かな、けりといった切字を持たない英語では、その表現がむつかしいところです。ダッシュ（—）感嘆符（！）などを使って「切れ」を表す手法は、発句（俳句）の翻訳によく見られますが、英語連句の実作の場でもまた良く使われます。しかしそれらに頼りすぎて安易な句になっていないだろうか？・・発句の「切れ」（cut と表現されます）とは？　発句と平句の違いは？・・これからの課題のようです。

今回は、上掲の句に付ける脇（日本語と英語）を佛渕健悟さんに試みて頂きました。

石山の石より白し秋の風　　翁
月すさまじく走る猿声　　健悟

through the chilly moon
a monkey scream　　(kh)

「（芭蕉はこの句について）付句が念頭にあったかどうか・・・」と腕組みされての挑戦、ありがとうございました。

「すさまじ」のもつ語感を"chilly"と表現されたのはいいですね。chill, chilly には秋気凄冷も感じられ、『季語』としての普遍性がありそうです。国際歳時記に取り組まれている方々のご意見も伺ってみたいと思います。"through" は、「月を突き通す」というような意味で使われたのでしょうか？　動詞がないので曖昧です。2ライン目（下七）の表現を工夫されるとよかったかもしれません。

次のように試訳してみました。

a monkey's cry
tears through the moon

「すさまじ」にどこまで迫れたでしょうか？調べ・リズムはどうでしょうか？・・皆さんも、ぜひ試してみてください。

＊連句と酒＊

「本音酒」　　**蒲原　志げ子**

『私に酒を語れと・・・・これは難題で三日三晩もあれば酒歴七十年の四方山を、ご披露出来ますが・・・・今、晩酌にして居りますのは、加賀の地酒でご存じ無い銘柄だと思います。値は手頃、味は最高、しゃしゃり出ず、すっきりと飽きる事がありません。ぬる燗がよろしい様で、肩の凝らない、昔から言う女房酒でしょうか、まあ、たまに何々大吟醸のと、美辞麗句に覆われた酒も頂きますが毎晩は疲れます。思い叶ってものにした愛人（妾）の華やかさも何時か鼻につく様なものでして、味の良さは申し分無くても、そうは続きかねます。いえ、経験は御座いませんよ、あちらで女房が聞いて居ります。自分に合った酒に落ち着くのに、随分時間がかかった、と言う事でして・・』『まあ抜け抜けと言って下さいました。聞くんじゃなかった。聞いたからには奥様、今宵は飲み明かしましょう』

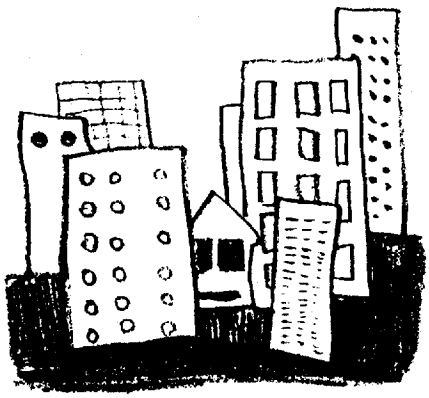
猫蓑会案内

▽『猫蓑作品集Ⅶ』作品募集

○ 形式は自由
○ 一人一篇（捌きは猫簑会員のこと）
○ 原稿用紙は必ずB4判で
○ 締切　十一月末日
○ 送り先
〒二七七　柏市加賀二－十二－十一
梅田　利子　宛

▽ 猫蓑連句会

○ 日時　平成十年一月二十一日（水）
十二時より歌仙興行
○ 場所　江東区芭蕉記念館



高木　蒼梧

杉内　徒司

第一回俳諧時雨忌（昭和四十六年十月十日）開催準備のため、青山学院裏門近くの義仲寺史蹟保存会東京事務所に大庭勝一常務を縷々訪ねていた頃、大庭さんから高木蒼梧著『俳諧人名辞典』を頂いた。

この本には著者、井本農一、中村俊定三氏の「再版の序」が載っているので、その一節を左記に紹介する。

本書に対して昭和三十五年十月、文部大臣賞を授与せられた、江島神社の宮司相原直八郎翁は、深くこれを慶祝せられ、曾て予が奉献の句を石に刻し、同島奥津宮の左方（魚見亭前方）に独立記念句碑を建てられたことを付記する。

昭和四十四年々末　於望岳窓　蒼梧山人

高木蒼梧翁の学殖については今更諜々を要さない。翁が多年の蓄積を傾けての本著が名著であることはまた言をまたない。本書はただに人名辞典であるばかりでなく、いわば列伝体俳諧史の趣すらあるのであって通読してまた興味津々たるものがある。

井本農一

高木蒼梧翁は俳文学の最長老で、明治・大正・昭和の三代にわたる俳文学研究に精通される生字引のような方である。

中村俊定

その後大庭さんに誘われた、町田市青柳寺の蒼梧翁一周忌（昭和四十六年六月二十七日）では、翁の息女厚子さん他沢山の俳文学者にお目にかかった。また大庭さんから、蒼梧翁著作『義仲寺と蝶夢』（昭和四十七年十一月刊）、『義仲寺のしるべ』（昭和五十一年十一月刊）（いずれも義仲寺史蹟保存会発行）等も頂き大いに重宝している。特に『義仲寺と蝶夢』は念稿を頼まれたので翁の深い学殖に驚嘆した覚えがある。

そこでいつしか蒼梧翁の経歴を知りたいと思ったが、平成七年十月刊の角川版『俳諧大辞典』には「高木蒼梧」の項目がないので物足らない思いをした。

昨年の俳諧時雨忌に厚子さんにお目にかかれたので左記の事を知る事を得た。

江の島の句碑の俳句は左記の通り。
夏富士や晩籟神を鎮しむる

蒼梧本名高木譲。明治二十一年十月十三日、愛知県犬山に生る。市橋鐸と小学校同級。愛知薬学専門学校卒。万朝報、朝日新聞記者二十余年。幸田露伴、沼波瓊音、伊藤松宇の教えを受け俳文学研究に入る。昭和四十五年七月十三日死去。享年八十三。

質問コーナー

東　明雅

【Q】　連句は日本の優れた文芸であると分かっているつもりでも、実作になってくると、色々なマンネリ化が気になります。どのような工夫をしたらよいでしょうか。

【A】　連句でマンネリを避けるには、いろいろな工夫、方法があるでしょうが、「不易流行」を自分の俳諧の根本理念とし、一生を新風の追求に費した芭蕉の芸術や生活は、随分参考になるのではないでしょうか。

この芭蕉の展開については七変説・五変説などもありますが、現在通説となっている三変説によれば、まず第一は、貞享元年（一六八四）の「冬の日」調の確立であります。延宝六年（一六七八）、江戸で俳諧の宗匠としていた芭蕉は、言語遊戯に終始していた談林調を脱却すべく、居を深川の草庵に移し、簡素な生活の中に、荘子を読み、仏頂和尚について禅を学び、まず、自分を革新することによって、作風を変えようとしました。これが貞享元年（一六八四）の「野ざらし紀行」の旅の途中、名古屋の連衆と巻いた「冬の日」の五歌仙によって、脱俗的・風狂的な世界が確立されたのであります。

その後、元禄二年（一六八九）の半年に及ぶ「おくの細道」の旅で、彼は「不易流行」を開眼、従来の古典的世界と眼前の日常的世界を調和させ、花実兼備の「猿蓑」の優雅な世界を創り出したのでありました。

さらに彼はこの完成された「猿蓑」の世界に満足せず、さらに新しい境地を目指す事になりますが、これは庶民の生活を軽妙な観察で描き出し、そこにかすかな「しおり」を求める「かるみ」の風で、俗語の自由な使用もその特色の一つであります。もともと「かるみ」は「おくの細道」の旅の途中、「古び」の自覚から思い付いたものと言われていますが、元禄七年（一六九四）の「炭俵」、その「梅が香」の巻、「秋の空」の巻などにその特色を見る事が出来ます。

マンネリを断つ事は、過去の自分を否定し、新しく生まれ変る事を意味します。それだけに並々ならぬ努力と痛みが伴なう事は当然でしょう。そのことは和歌・詩・俳句その他文芸一般に共通する事でしょうが、俳諧はそれら個の文芸ではなしに、連衆と共同製作による文芸でありますから、自分独りが生まれ変わっても、十分とは言えません。

その点芭蕉は非情と思える程の処置をしております。「冬の日」・「猿蓑」そして「炭俵」、そこに登場する連衆は殆どダブっておりません。これは旧い弟子共は、次々に変化して行く新しい芭蕉の俳諧についていけなかったというのが実情でしょうが、新しい俳諧を作るには、その一座もマンネリ化しては駄目だという事なのでしょう。

◇　猫蓑発展基金ご協力有難うございます。

一口　若尾よしえ　斉藤八千代

五千円　海野海砂

一万円　川野嘉彦　佐藤良彌　片山多迦夫

（敬称略）

◇　基金の口座　富士銀行新宿西口支店

普通３３７６０４５　猫蓑基金

……§……§……

あとがき

○　上野に「冷泉家の至宝展」を見に行った。定家の書はつぶつぶとして読みやすかった。この書体は「定家様」というのだそうだ。写書や編集に苦労した人に違いない。横にいた年輩の人はこれを「テイカサマ・・」と読んでいたが、読みやすい原稿はたしかに、「サマ」と呼びたい気がする。

○　「俳句の痩せは連句で回復する」とまで言われる昨今だが、その連句の原点は〝世態人情諷交詩〟（東明雅ー前号）にあること、肝に銘じるこの頃である。

季刊　「ねこみの通信」第二十九号
発行者　猫蓑連句会
編集人　〒一九五　町田市金井6-7-6　佛渕健悟
印刷所　アトリエ・Ｎｅｋｏ